

万吉だより

MA GECHI NEWS

第11号 平成21(2009)年10月

第6回企画展「熊谷キャンパスの遺跡」を開催して

立正大学博物館の平成21年度の企画展示として、熊谷キャンパス内における30年の遺跡調査を取り上げた。昭和40年代の初頭、関東の各大学は、急増した学生数に対応すべく首都圏縁近くに新たに大学キャンパスを確保した。立正大学の場合は、それが埼玉県北部の熊谷の地であった。

熊谷キャンパスは、伝統はあるが狭隘な大崎キャンパスを補完して40年が経過してきたところである。いまや8学部14学科を誇る立正大学の発展に熊谷キャンパスが大きく寄与してきた点は明らかである。熊谷キャンパスで教養課程を過ごした卒業生は、専門課程を過ごした大崎キャンパスと比較して、常に優れた自然環境を思い出として語っている。

昭和53年には、キャンパス内の諸施設建設に伴う校地内調査のために、学長を委員長とする校地内調査委員会が設置され、この指揮下に調査が遂行されてきた。30年間に調査した地点は50箇所以上を数え、25,000年前の旧石器時代から江戸時代に至る遺構・遺物が広く確認・調査されてきた。

近時は建設後40年を経過した校舎の建替えのための発掘調査を実施してきたほか、キャンパスの北側に隣接する老人養護施設の敷地も、立正大学関連施設として調査してきたところである。調査内容として最もまとまった成果が確認できたのは、この関連施設内の調査であった。

熊谷キャンパス内で調査した成果は、出土品を中心として博物館に保管・展示することに規定されている。旧石器時代から中・近世に至る出土遺物は、常設展示して来館者の展観に供している。しかしながら、興味をもって来館する学生数は極端に少ない。熊谷キャンパスにおける博物館学芸員志望の学生数の僅少さに由来するところと考えられる。

熊谷キャンパス設置40年を経過して、その意義も変化してきている。熊谷キャンパスに博物館が開館したのは平成14年であり、本年で8年目である。現在の考古資料を主体とする博物館を、開設時に目的とされた、人文・自然を包括した内容に拡大・総合化し、地域との連携を進展させることにより、大学博物館の存在意義が強調されよう。また、熊谷キャンパスには地球環境を名称として負う学部が設置されている。自然・環境を包摂した総合博物館の実現が強く求められるところであろう。

館長 池上 悟

新川河岸の石屋と墓石

熊谷市立江南文化財センター 新井 端

御正山家は、御正山東揚寺と号し本山派修験寺院として霞下寺院六か寺を有する大里郡下の年行事職の寺院であった。中世末期の由来を伝える文書のほか、聖護院門跡の書状などの聖教文書群や典籍類を多数伝えている（『江南町史 資料編3 近世』2003 江南町）。

ここに紹介する文書はほぼA4版に近い切紙の大きさで、本通に付された見取り図と思われる（図1）。本通は見当たらないため、時期は特定できないが天保期以降と思われる。図には笠塔婆型の石塔が描かれ法量が細部まで記載される。この石塔の注文を受けた石屋から送られた確認書であろう。

笠塔婆の全姿は、二段の台石に乗る四角形柱状の身部と笠部の四個の部材で構成されている（宝珠が別部材であれば五個となる）。

笠部は宝珠を笠中央に乗せ、四方へ葺き降ろす屋根は前面で破風を造り出す。笠の高さ7寸（21.0cm）、軒先での幅1尺4寸（42.0cm）としている。笠の受け台は身部の上位に彫り出し、幅を狭くしてバランスとアクセントをとっている。身の前面は宝珠形に内法を造る。中央には法号等を刻む額は「前ノ方永ミガキ」と注記される。縦内法は1尺5寸5分（46.0cm）、幅6寸7分（17.5cm）である。8寸5分（25.8cm）は身幅・奥行を示す。完成時には左右側面に造立者や被供養者名・造立年月日等が記される。

上位台石は一辺1尺8寸3分（55.8cm）、高さ6寸（18.0cm）で、下位台石は一辺1尺8寸



図1 墓石見取り図文書

（44.0cm）、高さ5寸（15.0cm）を測る。石塔の総高は3尺8寸（115.0cm）とあり、当地方では中型品の部類に入る。左側に「何足小相原上石ニ而可仕候 新川天水石屋櫓七」とみえる。上段は銘柄石の上質のものを使用すると意で、下段は新川天水石屋櫓七との石工の名が示してある。「小相原」は石屋で扱う石材の種類で、当地に数多く残されている石造物に使用された「安山岩」でいわゆる「小松石」であろう。「新川天水」は熊谷市の荒川河岸に近代まで所在した「新川河岸」で、「天水」とは右岸側（大里津田新田）に造られた河岸である。「石屋櫓七」は江戸時代末期にこの河岸に拠点を持った石屋であろう。

新川河岸は、寛永6年(1629)の荒川瀬換により、新流路となった荒川に造られた河岸場で左岸に久下・江川に、右岸側では天水に河岸場が設けられ、ともに新川河岸と呼ばれた。

江戸期を通じて付近の旗本領や忍藩領からの廻米の輸送を主とする一方、大型船の周航する最上流部の河岸場として多くの物資が集積した。高崎線の開通による大量輸送時代の幕開けとともに河岸場は衰退したが、明治9年調査の『武蔵国郡村誌』の記録では「戸数96戸、荷舟46艘、渡船4艘、荷車12両で、60石船が20艘、50石船6艘、30石船10層5石船10艘」とあり、商都熊谷を控え首都への通行・物資大量輸送の拠点であったことが知られる。

新川河岸とともに下流の小八ツ林河岸(熊谷市小八ツ林)にも近代まで石屋があり、後背地の小川・松山方面まで石材の流通が認められる。もともと河岸では護岸や水制のため石材を必需品としていたため、また重量物の運搬に水運が適っていたこともあり、商品として石材がもたらされていた。船運関係以外では蚕種・塩・雑貨などがみえ、河岸場が周辺地域への商業活動の拠点であったことを物語っている(『荒川 人文Ⅰ・Ⅱ』19 埼玉県史編纂室)。

周辺地域の近世石造物をみると、小松石と呼ばれた石材の利用が高い数値を占めると思われ、旧江南町域を覆う新川河岸の経済圏の中では河岸場を拠点とした石屋の活動により、農村又は町場へと搬入石材の使用が浸透していったと思われる。小川町では寛政4年(1792)銘の地蔵に「武州大里郡新川津田新田かし 石工半七」をはじめ新川河岸の下流の小八ツ林河岸の石工による石造物が明治期まで造られた。豊富に産出する緑泥石片岩製の墓碑が主体のなか、笠塔婆型の墓碑もあり、先の地蔵と同様に新川河岸などから運ばれた石材が用いられたようである(『小川町の墓石調査報告書』2002 埼玉県比企郡小川町)。旧江南町域では本

図にみる笠塔婆が大型品から小型品まで数多く、中小型品については 坂田家文書(旧江南町一春野原村)天保2年(1838)4月付御触書の周知徹底が反映しているようだ。御用留に記された禁制は、若年寄 堀大和守の名で発せられ「・・墓碑之儀高サ台石共四尺ヲ限り戒名江院号居士号等決而付申間敷候・・」としている。墓碑の高さを台石まで四尺とする制限は、本図の笠塔婆総高3尺8寸に見事に納まることから、製作時だけでなく写真にみるように、規制の範囲内で実際に造られていたことがわかる。

本資料は、いわばカタログにあたるもので実際に同家に建てられたかは定かではない。自己用ではなく修験寺院としての宗教活動に係わりのあるものかもしれない。江南地域では現物資料としての笠塔婆は中級以上の百姓層の墓地に数多くみられる。新川河岸場に拠点を置いた石工の商業活動の詳細な実態は今後の解明に待つところが大きいですが、その解明の糸口の一つとして本資料の提示をお許しいただいた所蔵者に感謝します。



写真 実際の笠塔婆型墓石(熊谷市三本町内)
右側の墓石は文書に見合う法量を持っている。

平成 21 年度第 6 回企画展 立正大学熊谷キャンパスの遺跡

—熊谷校地内遺跡調査 30 年のあゆみ—

平成 21 年 7 月 1 日(水)～ 31 日(金)にかけて、第 6 回企画展「立正大学熊谷キャンパスの遺跡—熊谷校地内遺跡調査 30 年のあゆみ—」を開催しました。

立正大学熊谷キャンパスが開設されたのは、昭和 41 (1966) 年のことでした。最初に建設された校舎は、水田埋立地に建てられたことから遺跡調査は行われませんでした。その後新たな校舎を建設することが計画され、事前に周辺の地域で遺跡などが確認されていることから埋蔵文化財調査を行う必要がでてきました。そして、昭和 53 (1978) 年に熊谷校地内遺跡調査委員会が設置され、その年 A・B・C 地点の調査が行われました。その後、校舎建設などの土地開発が行われる際には、必ず遺跡調査を行ってきました。また、その成果は『立正大学熊谷校地遺跡調査年報』として、現在までに 13 冊報告されています。

熊谷キャンパスは、埼玉県北西部に位置する熊谷市の江南台地上に所在します。江南台地の北側に和田吉野川、南側に和田川が東流し、大学の東側約 2.4 km の地点で合流しています。

熊谷キャンパス周辺には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が分布し、校地内遺跡にも同様の時期の遺跡が確認されています。

旧石器時代の遺物として、X 地点(現ユニデンス A・B 館)の発掘で、ナイフ形石器 3 点、楔形石器 1 点、スポール形石器 1 点、剥片が出土しました。年代は、およそ 2 万 5000 年前と考えられます。

縄文時代の遺構としては、S 地点(現 2 号館)の発掘で、縄文時代早期の大型竪穴住居跡(南北 11.5 m×東西 9.0 m の平面楕円形)が見つっています。遺物から約 11,000 年前頃に造られた住居跡と考えられ、この住居跡の北側に同時期と考えられる竪穴住居跡が 2 軒見つっています。

立正大学博物館 第6回企画展

立正大学熊谷キャンパスの遺跡

—熊谷校地内遺跡調査 30 年のあゆみ—



第 6 回企画展チラシ

また、e 地点(現特別養護老人ホーム)の発掘では、縄文時代早期に遡る自然流路跡や縄文時代中期の竪穴住居跡(長軸約 5.2 m×短軸約 4.1 m の平面楕円形)が見つっています。これらは出土遺物から自然流路跡は約 11,000 年前頃、竪穴住居跡は約 4,500 年前頃に造られたものと考えられます。その他の地点においても縄文時代と考えられる土器片などが出土しており、熊谷校地内に集落が展開していたことが窺えます。

弥生時代の遺構は見つかりませんが、X 地点の調査で土坑から有孔磨製石鏃が 1 点出土しています。

古墳時代から奈良・平安時代の遺構として、A 地点(現調整池)の発掘の際に、竪穴住居跡 2 軒(1 号住居跡;南北長 2.7 m×東西長 3.3 m の平面隅丸方形、2 号住居跡;長辺 2.15 m×短辺 2.05 m の平面隅丸方形)が見つかりました。出土遺物から約 1,300 年前頃に造られたものと考えられます。また、e 地点からは、竪穴住居跡(南北約 2.7 m×東西約 3.0 m の平面隅丸方形)が 1 軒見つ

りました。出土遺物から約 1,300 年前頃に造られたものと考えられます。その東側で行われた z 地点の発掘でも、竪穴住居跡が 1 軒見つかり、出土遺物から約 1,300 年前頃に造られたものと考えられています。この他にも竪穴状遺構などが見つかり、縄文時代以降、生活の場として使われていなかった熊谷校地ですが、古墳時代になり再び生活の場として使われるようになります。

中世から近世にかけての遺構は、住居跡などは見つかりませんが、X地点やW地点（現サークルボックス）の発掘で溝が見つかり、何に使われた溝かはっきりしませんが、出土遺物から中世の終わりから近世にかけての溝と考えられます。X地点で見つかった溝は、熊谷校地内の南側に隣接する文殊寺で見つかった増田氏館跡の溝と関連するのではないかと考えられています。

その他にH地点（現有隣館前ゲート付近）では、近世初頭の墓が見つかり、長軸 1.1 m × 短軸 0.6 m の平面不整形長方形の土坑で、数珠玉 3 点、指輪状銅環 1 点、銭（永楽通宝）1 点、人歯・人骨片が出土しています。

また、熊谷校地内で見つかった遺構のなかで注目されるのが 250 基も確認されている土坑群です。多くは平面円形を呈するもので、出土遺物が伴わないことから明確な性格が不明ですが、H地点の土坑や熊谷校地内の南西部の字名「下能万寺」（能万寺は「能満寺（現文殊寺の前身のお寺）」を指す）から、能満寺に関連する墓域の一部と考えられ、これらの土坑群は墓としての性格が考えられます。また、近年の発掘調査の事例から奈良・平安時代の墓域群としての可能性も考えられます。

その他に、展示では熊谷市教育委員会のご協力を頂き、文殊寺内、増田氏館跡（元境内遺跡）より出土した板碑片 9 点、塩焼壺 2 点、陶器 6 点を展示しました。X地点で見つかった溝と増田氏館跡の関連性から参考展示しました。

7月20日（月）に熊谷校舎にて、「立正大学熊谷キャンパスの遺跡」と題して池上悟館長に講演会を行って頂きました。

なお、大崎校舎における移動展を、9月18日（金）～10月17日（土）にかけて行いました。

（内田勇樹 立正大学博物館学芸員）



講演会の様子



展示会場の様子



大崎移動展示の様子

展示資料の背景 (10)

九十九坊廃寺出土瓦

第1展示室の古代・中世以降の展示コーナーに、九十九坊廃寺出土の瓦が4点展示されています。これは、昭和31年に立正大学仏教学部宗学科を卒業された青山今朝也氏が立正大学文学部考古学研究室に寄贈された遺物です。

九十九坊廃寺は、千葉県君津市内箕輪191ほかに位置し、千葉県南西部の小糸川右岸の標高約25mの丘陵麓に位置します。

調査は、昭和8(1933)年に大場磐雄氏が単独で塔心礎を調査されたのが最初です。その後、昭和59年に(財)千葉県文化財センターの調査が行われ、塔跡・講堂跡が確認されています。

展示品4点は、全て鏡瓦で、内区には四葉単弁蓮華文が表され、周縁には三重圏文が巡っています。1は、瓦当面の大きさ最大径16.4cm、瓦当縁の残存長19.0cmを測り、色調は灰褐色を呈します。内区面から周縁の高さは2.7cmを測ります。2は、残存する内区の大きさが径11.3cm、瓦当縁の残存長9.0cmを測り、色調は橙褐色を呈します。内区面から周縁の高さは2.7cmを測ります。

3は、大きさ最大幅13.6cm、残存長6.7cmを測り、色調は暗灰褐色を呈します。内区面から周縁の高さは1.7cmを測ります。4は、瓦当面の大きさ最大径15.7cm、瓦当縁の残存長12.8cmを測り、色調は暗灰褐色を呈します。内区面から周縁までの高さは1.6cmを測ります。

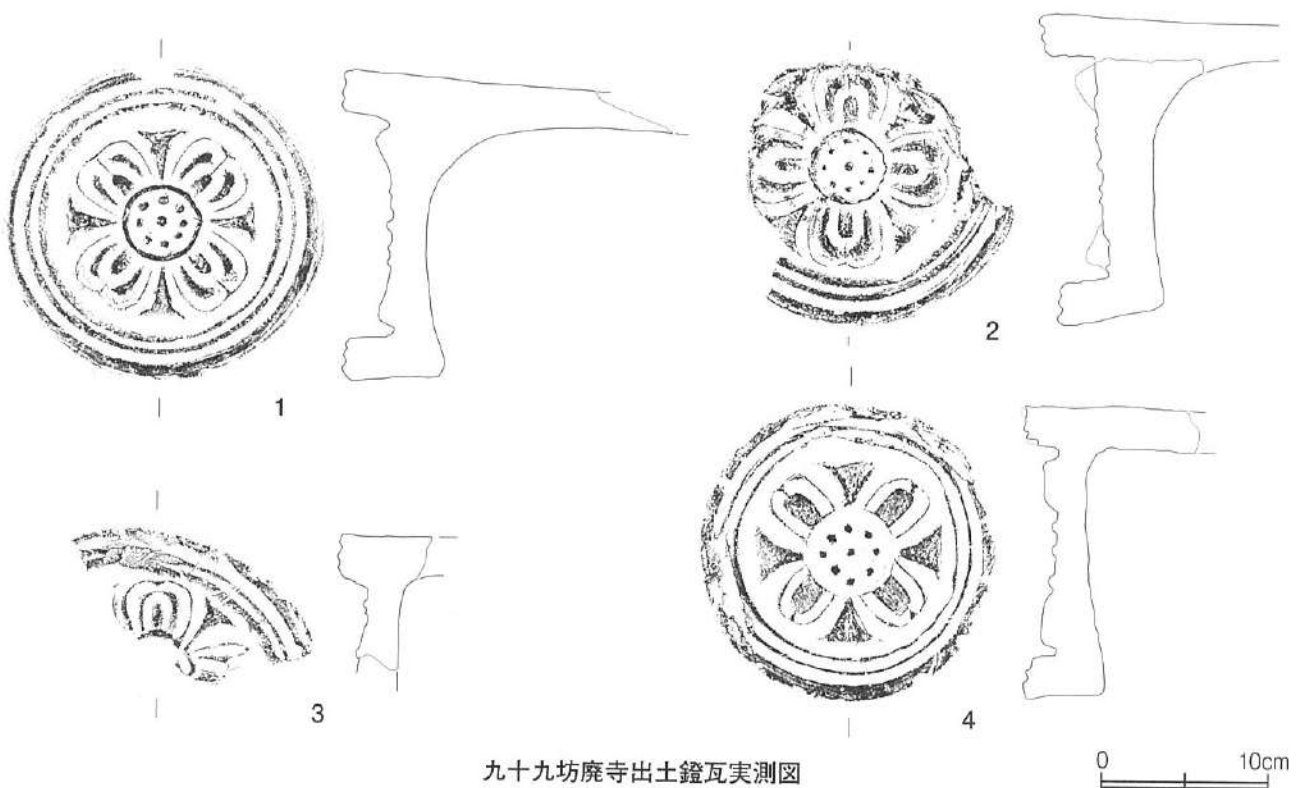
1と2は、内区から周縁の高さが深いもので、単弁の作りが肉厚です。3と4は、周縁の高さが1.7cmと低くなるのが共通します。3の単弁の作りは1・2の形態を残していますが、4は単純な作りになります。

九十九坊廃寺は、7世紀末から8世紀初頭にかけて造営された寺院と考えられています。

この他にも青山今朝也氏より、縄文時代前期の貝塚資料や地元の須恵器を寄贈して頂き、今後合わせて報告していく予定です。

※参考文献 『千葉県の歴史 資料編 考古3(奈良・平安時代)』県史シリーズ11(千葉県 平成10年)

(内田 勇樹 立正大学博物館学芸員)



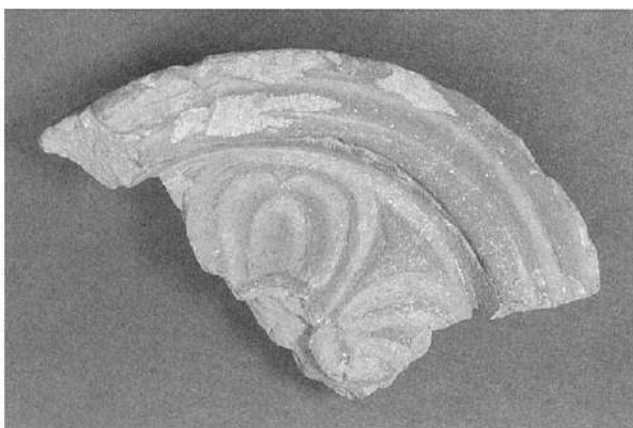
九十九坊廃寺出土鏡瓦実測図



1



2



3



4

写真 九十九坊廃寺出土鏡瓦

NEWS

来館者数

平成21年4月1日(水)～平成21年10月30日(金)
来館者数
4月132人、5月9人、6月108人、7月215人、8

月182人、9月60人、10月85人
計791人

出版物

平成21年度上半期は、下記の刊行物を発行しました。

- ・『立正大学博物館年報』7号(平成21年4月刊)
- ・第6回企画展図録『立正大学熊谷キャンパスの遺

跡―熊谷校地内遺跡調査30年のあゆみ―』(平成21年7月刊)

ホームページ

立正大学博物館のホームページがリニューアルされました。

これまでの刊行物のなかで、『館報「万吉だより」』

と特別展・企画展の展示図録がPDFで閲覧出来るようになりました。また、今後は展示遺物についても写真掲載を行っていきたいと思います。

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立させていただきたいと思っております。

・第6回企画展「熊谷キャンパスの遺跡—熊谷校地内遺跡調査30年のあゆみ—」を見学しました。熊谷校舎内にこんなに遺跡があるとは知らなかったです。

(県内・本学学生・19歳男性)

・企画展を見に来ました。古い時代から人々が生活していたことがわかり、驚きました。

(県内・本学学生・20歳女性)

・鐘を実際に鳴らして良かったです。音も非常に綺麗でした。

(県外・大学生・19歳男性)

・第6回企画展を見させて頂きましたが、こんなにも遺跡があることを初めて知ることが出来たので本当に良かったです。

(県内・一般・30歳女性)

・大学の校内なので入って良いのか戸惑いました。

(県内・一般・30歳男性)

・オープンキャンパスで立ち寄りました。展示物が多くゆっくり見学できなかったのが、また来て見たいと思います。

(県外・一般・40代女性)

・第6回企画展を見学に来ました。常設展示でもかなりの量の展示物でしたが、校地内遺跡でもいろいろな遺物が出土していることがわかり、大変良かったです。

(県外・一般・60代男性)

利用案内

所在地： 〒360 - 0161

埼玉県熊谷市万吉1700

立正大学熊谷キャンパス内

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

開館日： 月・水・木・金・土曜日

(大学休業中を除く)

開館時間： 10:00~16:00

*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。

・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あ と が き

今号は、新井端氏(熊谷市教育委員会)に原稿を賜りました。お忙しい中誠にありがとうございました。また、第6回企画展では元境内遺跡の資料借用を快く引き受けて頂きありがとうございました。今後も地域と協力し合い、より良い博物館活動が出来るように努力していきたいと思っております。

(内田)

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第11号

平成21(2009)年10月30日 発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

e-mail: museum@ris.ac.jp

http://www.ris.ac.jp/museum/index

印刷 光写真印刷株式会社